

実践研究事業 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業
「チョイス」 ～一緒に感じよう、見つけよう、
 自然・自分・仲間～

令和4年3月10日（木）日帰り

【担当：東島 憲之】

令和3年度 国立諫早青少年自然の家 教育事業

チョイス

一緒に感じよう、見つけよう
 自然・自分・仲間

子どもも大人も元気に
 「自然の中で遊んだ記憶、みんな死ななでず、
 『ママを連れて、春中に学校へ来た。』
 自然の家を利用した引率の先生や
 保護者の方からの嬉しい声です。

自然の中で、のんびり
 ココロにゆたかに、自由に外出できせせんよ、
 自然の家なら、体を動かしたり、
 季節を感じたり、さつこひ・たら、休んだり、
 自分ペースで楽しむ。

自然の家で、できること
 焚き火でのんびり

期日：3月10日（木）・11日（金）
 2日間に亘り、日帰りで実施します。

時間：10：00～14：15
 ※途中休憩も可設です。

会場：国立諫早青少年自然の家

いつ？ だれと？ 何したい？
 自分のスタイルを見つけて
 自然を楽しもう！

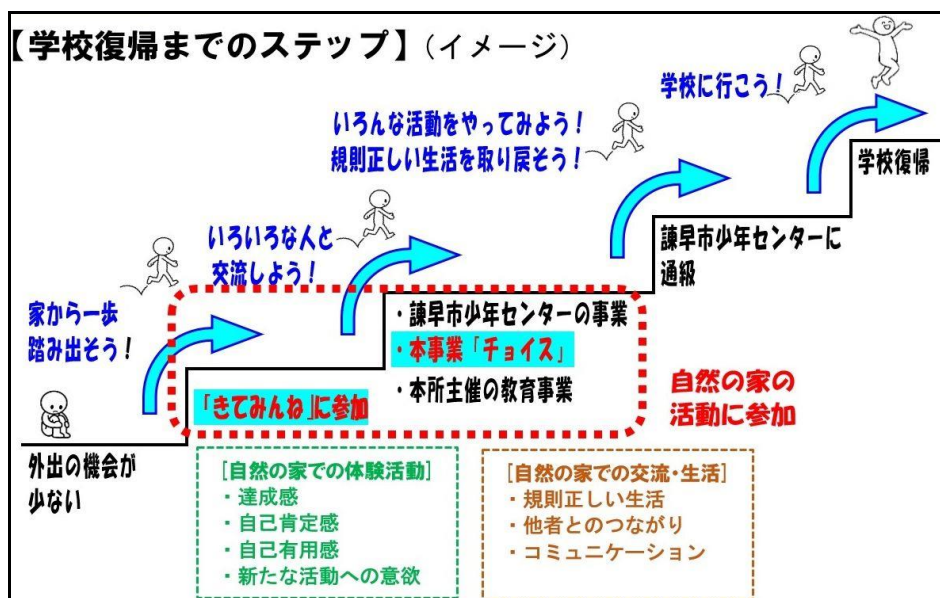
1. 事業の背景

不登校、引きこもりについては、令和2年度に実施された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）の結果が公表され、近年増加を続けていたいじめの認知件数が減少する一方、小中学校における不登校児童生徒数及び自殺をした児童生徒数が調査開始以来最多となるなど、新型コロナウイルス感染症による学校内外の生活や環境の変化が、子供たちの行動等に大きな影響を与える一因となっていることが伺える結果となりました。長崎県内では、令和2年度1,909名（前年度比119人増）の児童生徒が不登校の状態にあります。

また、当機構では、今年度から始まった第4期中期目標において、関係機関・団体や公立青少年教育施設等、大学の研究者等と連携した上で、実践研究事業を実施し、その研究結果を報告書を通して広く青少年教育関係者へ発信することが目標に定められました。

そこで本所では、諫早市少年センター及び長崎大学と連携し、同センターに通級している児童生徒を含む不登校・引きこもり等の課題を抱える子供たちを対象に、本所の提供する様々なプログラムを選択（チョイス）し、体験する活動を通して個々の興味関心を引き出し、次の一步を踏み出す意欲を高める支援に重点を置いた事業を企画しました。

本事業は、今年度は3月に試行的に実施しましたが、次年度以降、中期的に取り組んでいく予定です。



2. 事業の趣旨

子供たちが抱える喫緊の課題である「不登校・ひきこもり」について、自然体験活動を実施する中で、子供たちの課題解決に資するとともに、体験活動を行うことが自己肯定感や自己有用感を高めるために有効だとする「暗黙知」（長年の経験やノウハウ、イメージといった経験的知識として語られる知識）について、実践を通して、具体的に研究する。

3. 目標

- (1) 自然の家で様々な体験活動を楽しむことで、家の外での活動に対する意欲を持つことができる。
- (2) できる体験を繰り返すことで、達成感を味わい、自己肯定感、自己有用感を持つことができる。
- (3) 本所職員やボランティア等との関わりを通して、他者と交流することの楽しさを感じることができる。

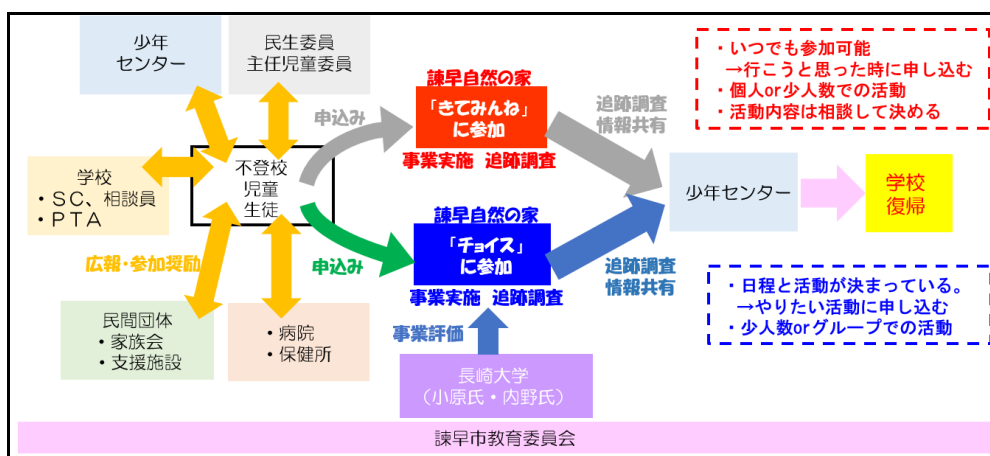
4. 対象

諫早市内の不登校、引きこもり等の課題を抱える児童生徒 20名程度（保護者も参加可）

5. 連携・協力団体

- (1) 諫早市教育委員会
- (2) 諫早市小学校校長会、中学校校長会
- (3) 諫早市少年センター
- (4) 諫早市PTA 連合会
- (5) 諫早市民生委員児童委員協議会連合会
- (6) 長崎県立こども医療福祉センター
- (7) 県央保健所
- (8) 長崎大学

【連携・協力団体のイメージ】



6. 事業の実施

(1) 期日

令和4年3月10日(木)、11日(金) 日帰り ※途中参加、途中帰宅も可

(2) 参加者

10日(木)	児童・生徒 14名、保護者 2名、連携団体引率者 4名 計20名								
	小5	小6	中1	中2	中3	保護者	引率者	計	
男	1	2	0	2	1	0	3	9	
女	1	0	1	5	1	2	1	11	
計	2	2	1	7	2	2	4	20	
11日(金)	参加者 無し								

(3) 日程

バス迎え ※希望者 (9:30 少年センター発)		
10:00 受付		
10:15 出合いの会(日程説明等)		
10:30 活動開始(選択活動)		
焚き火でのんびり	昼食 (持参)	焚き火でのんびり
火おこし体験		火おこし体験
ミニオリエンテーリング		ミニオリエンテーリング
葉っぱのスタンプ		葉っぱのスタンプ
室内スポーツ		室内スポーツ
14:00 ふりかえり		
バス送り ※希望者 (14:15 自然の家発、14:45 少年センター着)		

(4) 活動の様子(※本人及び保護者の意向により、写真の掲載なし)

【出合いの会】

参加者の活動意欲が高まるよう、屋外で円になり、今日1日が「自然の遊園地」と宣言することから会を始めました。1日のねらいを参加者とスタッフ全員で共有し、日程説明後に午前の活動を選択(チョイス)しました。その後、全員で焚き火に点火して活動をスタートしました。

【焚き火でのんびり】

出合いの会で着火した焚き火を見守りながら、のんびりと過ごす活動です。他の参加者が戻った時に焚き火が消えないよう、薪拾いや巻き割りに積極的に取り組んでいました。

【火おこし体験】

本所で来年度から利用者に提供予定の「まい切式火おこし器」を使った火おこし体験を行いました。火おこし体験は種火を作るまでに時間がかかる技術と根気が必要な活動でしたが、午前中につけることができなかったことを悔しがり、午後も同じ活動を選んだ参加者もいました。親子で交代しながら協力して摩擦棒を回し、最後の最後に着火できたことを喜ぶ姿が印象的でした。

【ミニオリエンテーリング】

施設周辺に設置した18か所のポストを探す活動です。ポストを見つけるごとに、全員で地図を見合い、相談して次のポストを見つけていました。活動を続けていくうちに親睦がさらに深まり、道を間違えてもフォローしあえるようになりました。午前も、午後も時間一杯まで活動し、すべてのポストを見つけることができました。

【葉っぱのスタンプ】

施設周辺にある葉っぱを集め、絵の具を塗り、コットンバッグにスタンプする活動です。本所で実施した事業の中で好評を博し、来年度から利用者へ提供する活動を先取りで実施しました。葉っぱに色とりどりの絵の具を塗り、個性豊かな作品を作り上げていました。

【室内スポーツ】

日頃運動する機会の少ない子供たちは、少年センター主催の事業で本所を利用する際も、プレイホールで行うスポーツを楽しみにしています。今回も午前中はバスケットボール、午後はバドミントンと、何をするかを自分たちで話し合っ、楽しく活動することができました。

7. 評価

(1) アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

(2) 参加者、保護者の声

① 参加者

- ・いつもは班の中で成功を目指す活動が多くありましたが、今日は自分で活動を決めて楽しく過ごすことができ、楽しかった。
- ・自分は普段、優柔不断なところがありますが、他の人から意見を求められたり、相手の意見を聞いたり、自分で考えることが多くて楽しかった。
- ・人の役に立てていることが嬉しく、失敗しても笑いながら楽しく過ごせました。

② 保護者

- ・いつもならできない事に腹を立てたり、あきらめたりしてしまう場面でも怒り出さずに最後まで活動しようとしていて、成長を感じることができました。
- ・仲間と楽しそうにスポーツする様子を見守ることができ、葉っぱのスタンプも親子で取り組めて良かったです。また、参加させたいと思います。

8. 成果と課題

(1) 成果

5つの活動の中で「室内スポーツ」を選択する参加者が多い中、中学3年生の男子生徒は活動開始直前に「いつでもできる活動だから」とミニオリエンテーリングに活動を変更しました。周囲に流されず、自分の意志で活動を選択する貴重な経験となりました。

諫早市少年センターの職員の方から、「今回のように活動を個人の意志で決定する機会は各学校の宿泊学習では人数が多く難しいため貴重な」との感想があり、参加者のアンケートでは、「いつもは班の中で成功を目指す活動が多かったが、自分で活動を決めて楽しく過ごすことができた」との回答があった。これは、本事業の大きな成果の一つと考えられました。

(2) 課題

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により各学年のまとめの時期である3月の実施予定となり、参加を呼びかけにくい状況でした。今後は学校の行事予定等に配慮した実施時期とすることが必要です。

また、連携団体から適応指導教室の通級生のうち本事業の参加対象者に該当しているのは一部の児童生徒に限られるとの助言をいただいた。今後は広報先の再検討が求められます。

今後も、同様に活動選択の機会を設定していく予定ですが、繁忙期はスタッフの調整が困難なため、事業の実施時期等を検討していく必要があります。

事業の運営スタッフについては、コロナ禍の影響により予定していた法人ボランティアの参加を依頼できませんでした。しかし、本所学生サポーターと参加者の交流は、より参加者に寄り添った支援になっており、参加者に近い年齢層のスタッフの必要性を感じました。そのため、今後は、大学生などより多くの若い法人ボランティアが事業運営に係わるような体制を整えていく必要があります。

(3) 今後の展望

これらの課題を踏まえ少年センターとの連携を密に行い、実施時期や回数を計画していきます。また、参加時の不安が軽減できるように、連携団体等から得た情報を踏まえ、参加者の家庭のニーズに対応できる体制を整えていきたいと考えています。